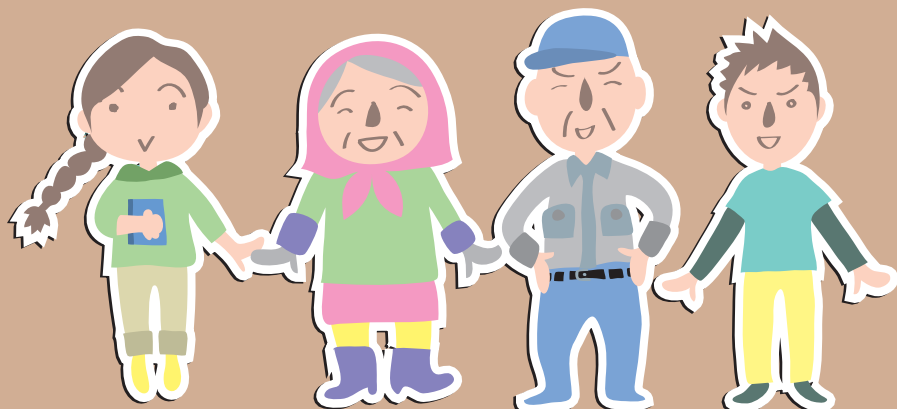


聞くこと・

記録すること

「聞き書き」という手法



Contents

- 1 聞き書きの意義
「聞く」ことから始まる
—「聞き書き」による自然共生社会の実現—

- 6 「聞き書き」12の心得

- 18 聞き書きの実践
「聞き書き」をしてみよう！

- 26 聞き書きの応用
「聞き書き」の手法を活かした
教育プログラムの実例
—日本の「聞き書き甲子園」の活動を中心に—

- 34 「聞き書き」作品

あとがき

奥付

「聞く」ことから はじまる

「聞き書き」による自然共生社会の実現

地球には多種多様な生物が、それぞれ異なる環境に適応し、生きています。人間もまた、その自然環境に応じて生活文化を育み、自然と共生しながら暮らしてきました。

たとえば、日本の伝統的な家屋は、木と土からできています。家具はもちろん、暮らしの中の道具も、そのほとんどが木からできていました。衣服は、植物の繊維や蚕の繭から糸を紡いでつくりました。煮焚きや暖をとるには、薪や炭が欠かせないものでしたし、草木や落ち葉は、腐葉土や堆肥となって田畑の実りを約束しました。

人々が古くから持続的に利用や管理してきた農地や二次林など、人間活動の影響を受けて形成・維持されている二次的自然環境は、特有の生物の生息・生育環境として、また、食料や木材など自然資源の供給、良好な景観、文化の伝承等人々の暮らしの観点からも重要な地域です。

しかしながら、こうした自然環境やそれが象徴する持続可能な慣行や知識は、都市化、産業構造の変化、地方の人口の急激な増減、高齢化の進行などにより、大きな変化を受けており、二次的自然環境で育まれてきた人々の暮らしや生物多様性は、世界の多くの地域で劣化や存続の危機にあります。

これらの二次的自然環境を持続可能な形で保全していくために、その

価値を広く再認識するとともに、その取り組み事例を収集、分析し幅広く情報発信をすること、さらに、こうした地域での伝統的な利用・管理手法の再評価をする必要があります。

それぞれの地域の固有の文化や歴史、自然と共生してきた暮らしのあり方を改めてみつめ直すことが必要だと私たちは考えています。

そのためのひとつの手法が、この冊子で紹介する「聞き書き」です。

■人と人をつなぐ

「聞き書き」は、一対一の対話を通じて、「話し手」の人生や価値観を引き出し、記録する作業です。「話し手」の言葉はすべて録音し、一言一句を書き起こして、その語り口を活かしながら文章にまとめます。

できあがった作品は、まるで、その人が自ら、自分の人生を語っているようなスタイルに仕上がります。その人の経験や知恵、これまでに培ってきた価値観や考え方とともに、その人柄が浮かび上がります。

「聞く」ことは、コミュニケーションの原点です。「聞き手」は「話し手」に質問しながら、相手への理解を深めていきます。自分を主張するのではなく、まずは謙虚に人の話に耳を傾けること。質問を重ねながら対話する中で、その人の考えをうまく引き出すこと。素直に自分の感動を伝え、その人の気持ちに寄り添うこと。共感する姿勢が「聞き書き」には求められます。

地域に暮らす人々の言葉に耳を傾け、その思いを聞くこと、対話をして書きとめるという共同作業をすることで、相手を信頼し尊重することが可能になります。同時にそれは、その地域の自然や歴史、文化を見つめなおす作業につながるものと考えています。

■世代と世代をつなぐ

私たちの生活文化は、その土地の自然や風土と深く対応しながら形成さ

れてきました。文化は、人から人へ、世代から世代へと伝わるうちに、その時代の、あるいはその人なりの知恵や工夫や価値観を加えつつ、受け継がれていきます。

同じ林業に携わる名人でも、育てる樹種や作業のやり方は、その土地の自然条件や歴史、名人の技術や考え方などによって異なります。それらをひとつひとつ丁寧に集めていくと、その地域の特色や風土、歴史、生活文化が浮かんできます。「聞き書き」で記録するのは、人々が自然とともに生きる中で育んできた有形、無形の文化であり、歴史であり、生きるための知恵、生き方そのものなのです。

年長者の話に、きちんと耳を傾けてみましょう。長い人生の間で培ってきた経験は、私たちの未来にとって学ぶべきことが多いはずです。先人たちの生活技術と知恵の集積を若い世代が聞くことは、伝統的な二次的自然の利用・管理手法を再評価や今後の保全活用につながる新たな手法の発見にもつながると考えています。

■人と自然をつなぐ

SATOYAMA イニシアティブは、二次的自然を見直し、持続可能な形で保全・利用していくためにはどうすべきかを考え、行動しようという取り組みです。より持続的な形で土地および自然資源の利用と管理が行われるランドスケープの維持・再構築を目指して以下の3つの行動指針を提案しています。

- ・多様な生態系のサービスと価値の確保のための知恵の結集
- ・革新を促進するための伝統的知識と近代科学の融合
- ・伝統的な地域の土地所有・管理形態を尊重した上での、新たな共同管理のあり方の探求

行動指針では人間の福利の向上をもたらす多様な生態系サービスと価

値に関する理解と知恵の結集は不可欠の要素であり、また伝統知識のさらなる有効活用について検討することも重要です。「聞き書き」によって、その知恵や技術、暮らしの詳細を収集し、集積することが必要になってきます。

先人たちは、里山や里地、里海をどのように持続的に利用し、管理してきたのか。人々はどのような自然に対するルールをつくりながら、ひとつの共同体として力を合わせてきたのか。人間の働きかけによって、いかに生物多様性は保たれてきたのか。そのことを知るためには、そのような暮らしを実際に営んできた「人」に聞くしかありません。人と人、世代と世代、人と自然をつなぐために。ぜひ「聞き書き」の手法をご活用ください。

(※) エコロジカル・フットプリントは、地球の環境容量をあらわしている指標で、人間活動が環境に与える負荷を、資源の再生産および廃棄物の浄化に必要な面積として示した数値である。

「聞き書き」を体験した若者たちの言葉

日本の「聞き書き甲子園」の活動より

話を聞く中で、森の「悲鳴」が肌を伝わるように感じました。

.....
(高校2年生・男子)

「辛いことがいっぱいあっただよ」と話すお爺さんの顔は、優しさに満ちていました。

.....
(高校1年生・男子)

「人生を一言で表してはいけない」と言われた。その言葉は私の心に響き、「聞き書き」の重さがわかった。

.....
(高校3年生・女子)

自分の目で見、耳で聞き、手を触れることを通してこそわかることを大切にしていきたい。

.....
(高校1年生・女子)

74歳になるお爺さんが、こんなにもパワフルで、エネルギッシュで、目が生き生きしているとは知らなかった。ひとつのことに打ち込む姿は、見ていて惚れ惚れした。

.....
(高校2年生・女子)

人一人の中にこんなにも物語が溢れているのです。それは当たり前のことかもしれません。しかし特別なことだと思います。

.....
(高校1年生・女子)

森は生活の下地のようなものかもしれないと思った。離れた存在ではない、ごく自然に暮らしとつながっている、そんな森の存在を感じました。

.....
(高校2年生・女子)

技術は技術だけで伝わっていくものではないと思います。必ず、その裏には先人たちの思いや英知が込められていると思います。

.....
(高校2年生・男子)

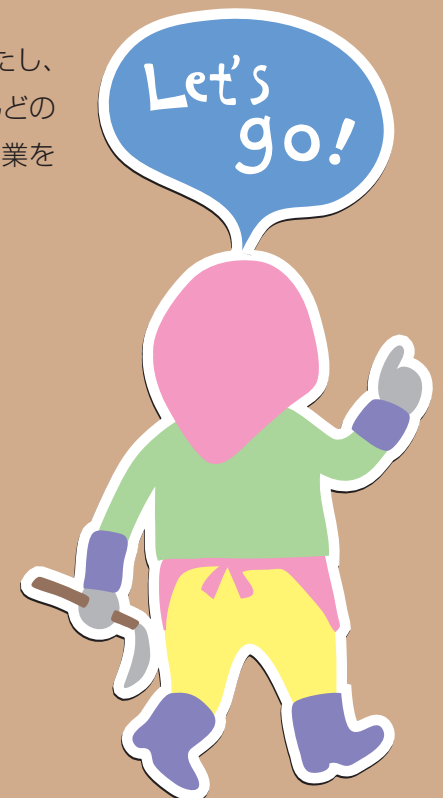
現場を歩く、本物を見る、 その人があたためてきた 言葉を聞く

仕事を訪ね、土地や風土を感じ、
そこで生きる知恵や技術を教わり、
その人の人生や価値観に触れる。理
解したい、知りたいと思ってくれる
人がいるから、“私”は語り始める。



職業を通じて 浮かび上がる人生

衣食住を満らし、社会での役割を果たし、
自らの価値観を育て、人生のほとんどの
時間を費やすのが「職業」。その職業を
中心に、個の人生を見つめる。



その時代の、 その人の言葉を聞く

話し言葉は、一人一人が生きてきた背景や個性を表す。地域特有の方言、その時代、その職業ならではの言葉、その人の語り口を大切にしよう。



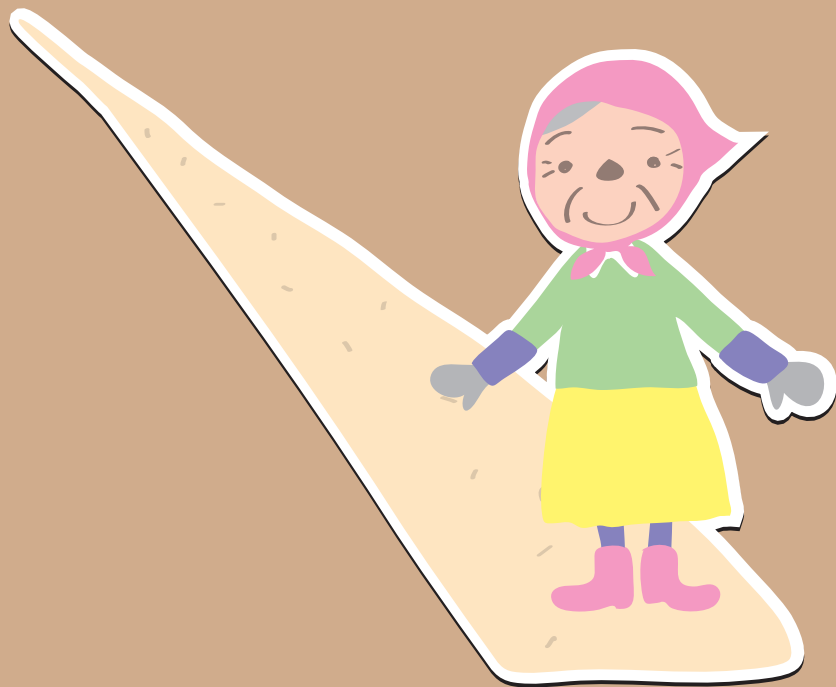
文才ではなく、 素直さと尊敬する気持ちが 大切

「聞き書き」には、エッセイストや小説家の才能はいらない。知りたいという好奇心、素直にわからないことを聞く勇気、驚きや感動を伝える姿勢、相手を尊敬し、大切に思う気持ちがあればいい。



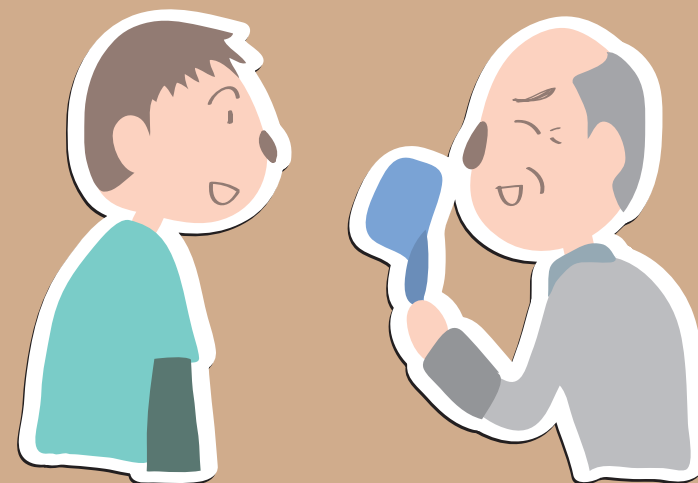
個の尊厳をみつめよう

人には、それぞれ異なる人生があり、長い道のりを歩んできたからこそ、語れる言葉がある。社会や時代は人を埋没させてしまうが、あなたが聞き出す人生は消えない。



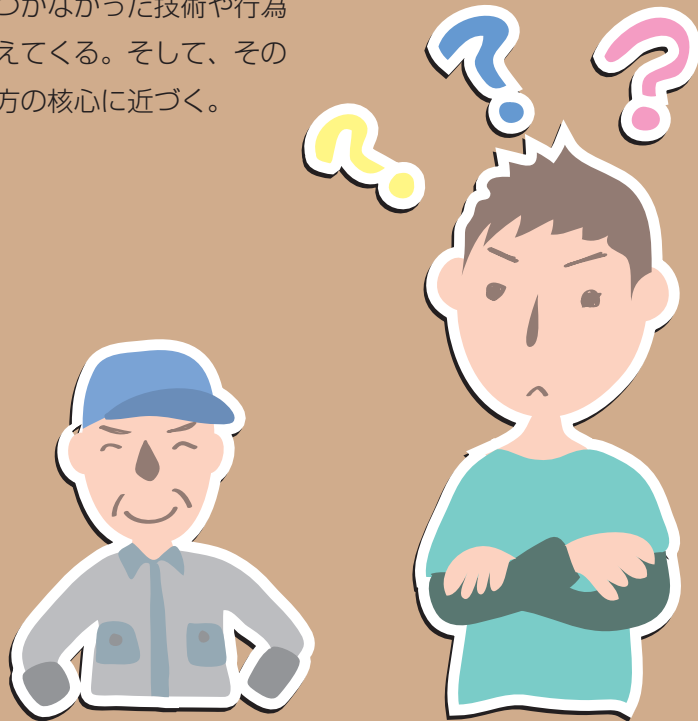
「聞き書き」は、 人との出会いから はじまる

まず初めに挨拶をしよう。まなざしを交わし、言葉を交わし、なぜ会いに来たのかを伝える。まっすぐな真摯な態度で、あなたが向き合えば、「話し手」はきっと心を開いてくれる。



人生は 一言では表現できない

「なぜ」、「どうして」という疑問を大切にしよう。質問の角度を変えながら、丁寧に話を掘り下げていけば、それまで気づかなかった技術や行為の細部が見えてくる。そして、その職業や生き方の核心に近づく。



「話し手」と「聞き手」の 思いが響き合って、 ひとつになる

二人の「対話」はすべて録音し、一言一句を書き起こしていく。その過程で「話し手」への理解はさらに深まるだろう。あなたが「話し手」に共感する気持ちが、作品を仕上げる原動力。



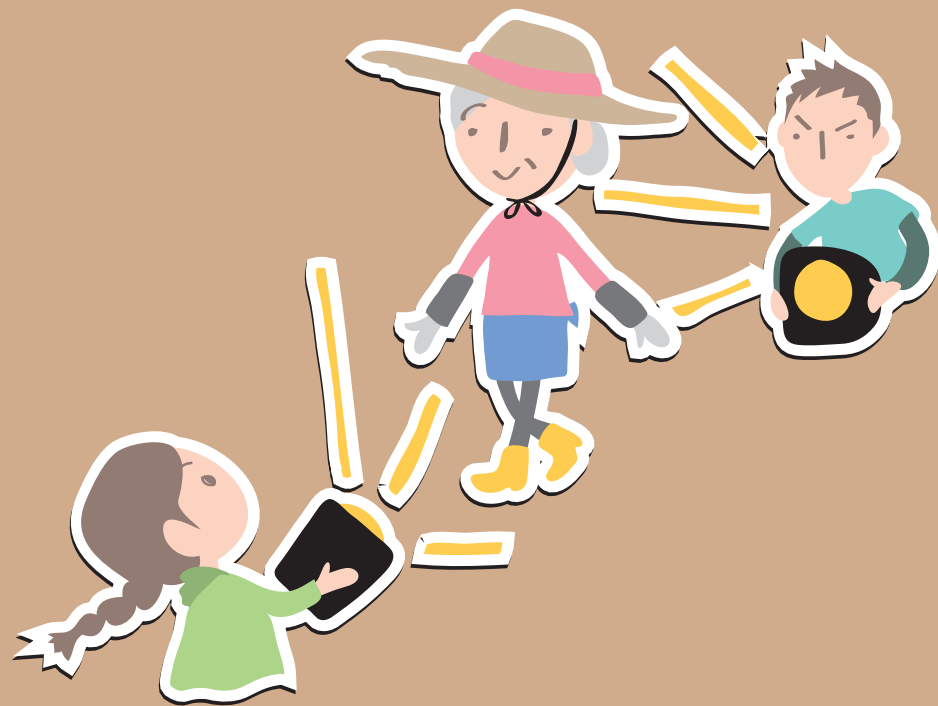
足し算はダメよ、 引き算だけね

「聞き書き」は「話し手」の言葉だけで文章をまとめる手法。「聞き手」の感想や考察を添えて、作品をごまかすことはできない。「話し手」の言葉の中から大切な部分を見極めて、不要な部分は削る。



「聞き手」によって、 「話し手」は輝きを増す

「話し手」は、「聞き手」があてる光の角度によって、異なる自分を見せてくれる。同じ「話し手」でも、「聞き手」が他の人であれば、違う作品が仕上がる。それが「聞き書き」の面白さ。



「話し手」と「読者」の 仲人役はあなたです

編集は、読者が理解しやすいように整理するのが基本。読者は、あなたの作品を通じて、はじめて「話し手」と出会う。仲人役のあなたは、親切で気配り上手でなければならない。



「聞き書き」は、 「話し手」と「聞き手」が 共に創るもの

「聞き書き」は、「話し手」と「聞き手」の二人三脚で成り立つもの。「話し手」との信頼関係を大切にしよう。「ありがとう」を交わし会えたら、それは1つのゴールです。



「聞き書き」をしてみよう！

step-1 「聞き書き」の準備

「聞き書き」の一步を踏みだそう！

1 話し手を探す

「聞き書き」のテーマを考えて、その目的に合う地域や職種などから話を聞かせてもらう人を探しましょう。先生や家族、友人などに紹介してもらうのもよい方法です。

2 話し手にお願いする

電話や手紙で取材を申し込みます。「聞き書き」の目的を説明し、承諾を得られたら、訪問する日時や場所を相談します。

3 下調べ、質問表づくり

「話し手」の職業や住んでいる地域について、本やインターネットで調べ、それをもとに質問を考えて箇条書きのメモをつくります。この作業で、話の流れや聞くべきことを事前に整理しておきます。

注意！

「聞き書き」は一問一答式のインタビューではなく、「話し手」と対話し、質問を重ねながら丁寧に聞き出すことが重要です。ですから「聞き書き」のときは、できるだけメモは見ないようにしましょう。メモは、あくまでも備忘録です。

4 持ち物を確認

録音はくれぐれも失敗ないようにしましょう。録音機の使い方は事前に確認し、操作に慣れておくこと。バッテリーのチェックも忘れずに。

チャレンジ！ 質問をするコツ

あなたは「聞き書き」でどんな質問を用意しますか。

以下の例を参考に考えてみましょう。

トピック	質問例
基本情報	年齢、生年月日、出身地、家族構成など。
子ども時代	生い立ち、子どもの頃の夢など。
仕事の内容	材料、道具、仕事をする場所や時期、具体的な作業手順、仕事の上で注意すべきことなど。
仕事への思い	仕事のやりがいとは何か、熟練するために必要なことは何か、苦労したことは何かなど。

確認しよう！ 持ち物リスト

□ 録音機

テープレコーダーやICレコーダーは必ず準備しましょう

□ バッテリー

電池は新しいもの、充電したものを使いましょう。予備も忘れずに

□ カメラ

「話し手」のポートレートを撮りましょう。作業場や道具なども写真に撮っておくと、作品を補足する際に役立ちます

□ ノートと筆記用具

わからない単語や詳しく聞きたいと思ったことをメモしておく、後で役立ちます

step-1 のポイント

初めて会う人の人生を、一対一でじっくり聞かせていただくということは、なかなかないことです。きちんと準備し、誠意をもって「聞き書き」に臨みましょう。

step-2 「聞き書き」の当日

いよいよ出会いの時。聞くことを楽しもう！

1 はじめに話すこと

まずは、きちんと挨拶をし、自己紹介をしましょう。「聞き書き」の趣旨を説明し、録音や写真を撮ることの了承を得てからはじめます。

2 場所と時間

できるだけ静かな、落ち着いた場所を選んで話を聞きましょう。作業場や道具、資料なども見せていただくと、話への理解が深まります。

注意！

録音機はできるだけ「話し手」の近くに置きます。周囲の雑音にも気を配りましょう。また、録音機だけに頼らず、話の内容は適宜、メモをとりましょう。

3 質問について

その人の名前、生年月日、家族構成、職業など、基本的なことを確認してから、本題に入ります。

人の話は、つい細かな部分が省略されがちです。丁寧に細かく、わからないことは積極的に質問しましょう。あなたの態度や表情、興味、関心によって、話の内容は変化していきます。あなたがその話に興味を持てばもつほど、相手も喜んで話をしてくれるでしょう。

注意！

「話し手」の職業や人生の深さを表現するためには、具体的なエピソードの積み重ねが重要です。ですから「仕事の難しさを一言で表すと？」「生きがいは何ですか？」というような抽象的な質問は避けましょう。

チャレンジ！ 質問をするコツ

当たり前のことをきちんと聞く

「話し手」にとっては常識的な当たり前のことであっても、それが、その職業で最も大切なことであり、技術上のポイントである場合があります。わかったつもりにならずに、きちんと聞くよう心がけましょう。

具体的な話を聞く

いつ、どこで、誰が、何を、どうして（何故）、どのようにしたのか？ 5W1Hを丁寧に聞きましょう。

仕事や暮らしの流れを聞く

一日の作業や、一年の仕事や暮らしの様子を丁寧に聞いていくのも、ひとつの方法です。そうすると、仕事の全体像が見えてきます。

確認しよう！ 注意すべき言葉

形容詞

「大きい」、「きれい」などの形容詞が出てきたら、要注意です。具体的にどのぐらいの大きさなのか、どのように「きれい」のかを質問し、言葉を補ってもらいましょう。

固有名詞

地名や人名などの固有名詞が出てきたら、書き方を確認しましょう。道具など名称を聞いただけではイメージしづらいときには、絵に書いてもらいながら話を聞くのもひとつの方法です。

専門用語

専門用語やわからない言葉が出てきたら、その意味を尋ねましょう。また、その用語の書き方も確認しましょう。

step-2 のポイント

相手を尊敬し、謙虚な気持ちで話を聞きましょう。あなたが「知らない」のは当たり前。決して恥ずかしいことではありません。

step-3 「聞き書き」の書き起こしと編集

「話し手」が伝えたいと思ったことは何だろう？

1 テープ起こし

録音したお話を、その人の話し口調のまま、一字一句書き起こします。時間と手間のかかる作業ですが、「話し手」に対して理解深め、どのような作品をつくるのかを考える大切な機会です。

注意！

テープ起こしをすると、録音が聞きとれないところがあるかもしれません。話の内容をきちんと理解できていなかったことに改めて気づく場合もあるでしょう。できれば何回か会って、話の続きを聞いたり、確認をとるようにしましょう。

2 文章を整理する

「聞き手」の質問を消して、「話し手」の言葉だけで文章をまとめていきます。質問を消しただけでは意味のわからない文章になる場合がありますので、主語などを補いながら作業します。

人の話はあちこちに飛んだり、同じ話を何度もしたりします。同じ話はひとつにまとめましょう。また、「あのう」「えーと」など、話し言葉独特の言い回しは、読みやすくなるように削除し、整理しましょう。

3 文章を削る

「話し手」の人柄や職業をより鮮明に浮かび上がらせるために、不要と思われる内容は思いきって削除しましょう。

注意！

愚痴や口癖、誰もが語る抽象的な人生論などは削除しましょう。その人の人生や生き方にとって大切なものが何か、伝えたいものが何かをきちんと見極めましょう。

チャレンジ！ 文章の編集

作品を読みやすくするために、必要に応じて主語などを補い、話の順序を入れ替えます。整理の仕方はあなたの工夫次第ですが、「話の趣旨を曲げない」、「話し手の人格を崩さない」ように注意しましょう。

●書き起こした文章

Q「森林組合で働き始めたのは、何歳の時ですか？」

A「えーと、22歳のときです。母はとても喜んでくれました」

Q「それは良かったですね」

A「ええ。母は父の……。父は樵だったのですが、その姿を僕に重ね合わせたのかもしれない」

●整理した文章の例

22歳のとき、私は森林組合で働き始めました。そのことを母はとても喜んでくれました。樵だった父の姿に僕を重ね合わせたのかもしれない。

確認しよう！ 「聞き書き」作品は冒頭の文章が肝心です

作品の冒頭では、「話し手」に関する基本的な情報（名前や年齢、家族構成、職業など）を、その人の言葉で紹介するようにしましょう。

自分の人生を語ろうとしている人が、基本的にどんな人なのかをあらかじめ理解できると、読者は安心して作品を読み進めることができます。

step-3 のポイント

読者は「話し手」のことを何も知りません。その読者にも、きちんと話の内容を理解してもらえるように作品を仕上げていきます。

伝えたいポイントを整理して、「話し手」の語り口を活かしながら文章をまとめましょう。

step-4 「聞き書き」作品の完成

あと一歩！わかりやすく、おもしろい作品に仕上げよう。

1 全体の構成を考えましょう

文章全体の構成を考えましょう。たとえば、子供の頃の話から時系列で文章をまとめていった方が良いか。あるいは、最近の出来事で、印象的な話から切り出した方が良いか。作品の構成は、あなた次第です。

わかりやすく、面白く、読者が興味をもって読むことができるように工夫しましょう。

2 題名と小見出しをつける

作品の流れが決まったら、内容のまとめごと「小見出し」をつけ、作品の題名（タイトル）を考えましょう。

また、「話し手」と「聞き手」の名前、取材した年月日を作品に添えましょう。

3 「話し手」に内容を確認してもらおう

作品がまとまったら、必ず「話し手」に読んでもらい、内容を確認してもらいましょう。間違いや補足する点、削除すべき内容がないかどうかを相談し、必要な修正を加えて作品を完成させます。

完成した作品は、冊子などにまとめましょう。できた冊子は「話し手」に改めてお届けし、感謝の気持ちを伝えましょう。

チャレンジ！ 作品が完成したらチェックしてみよう

- ☐ 作品の冒頭で「話し手」の名前や性別、年齢、職業、住んでいる場所、家族構成など、基本的な情報がわかる文章になっているか。
- ☐ 作品のテーマには一貫性が保たれているか。「話し手」の人生や人柄が、その職業などを通じて、よく描かれているか。
- ☐ 重複する文章は削除し、整理できているか。
- ☐ 読者を混乱させる文章になっていないか。（たとえば、昔の話と今の話が混在し、何度も行き来するなど）
- ☐ 「あのう」「えーと」などの口癖は、読みやすく整理されているか。「あれ」、「それ」などの指示語は、何を指しているかが理解できるよう、具体的な言葉に置き替えてあるか。
- ☐ 「そんな感じ」「こういう所」など、抽象的な言葉は、具体的なイメージを伝えられる言葉に置き換えてあるか。
- ☐ 固有名詞（地名、人名、道具の名称など）は、間違っていないか。主語（私、俺、僕など）は統一されているか。年号（日本の年号と西暦）や単位（センチ、cmなど）の表記は統一されているか。
- ☐ 一文は長すぎないか。改行や段落をうまく活用しているか。
- ☐ 専門用語には、簡単な説明や補足を加えているか。
- ☐ 誤字、脱字はないか。
- ☐ 読者の興味をそそるような題名や、わかりやすい小見出しがついているか。「話し手」と「聞き手」の名前、取材した年月日が作品に添えられているか。
- ☐ 「話し手」に内容を確認してもらい、必要な修正を加えているか。冊子にまとめる場合は、「話し手」の了承をきちんと得ているか。

step-4 のポイント

「聞き書き」は、その人が生きてきた証を書き残す作業です。「話し手」と「聞き手」の信頼関係を大切にしながら、作品を完成させましょう。

- 「聞き書き」の手法を活かした
- 教育プログラムの事例
- —日本の「聞き書き甲子園」の活動を中心に—



日本では「聞き書き」の手法が、教育現場でも活かされています。

2002 年から始まった「聞き書き甲子園」は、その代表的な事例です。これは、毎年 100 人の高校生が、自然に関わる生業を営む「森の名手・名人」や「海・川の名人」を訪ね、一対一の対話を通じて、その知恵や技術、ものの考え方や生き方を「聞き書き」し、記録する活動です。

「話し手」となる「森」や「海・川」の名人は、農林水産省が、それぞれの分野に関連する民間団体を通じて選定を行っています。一方、「聞き書き」をする高校生は、文部科学省が全国の高等学校に呼びかけて募集を行っています。プログラムの運営はNPO法人共存の森ネットワークが主体となり、多くの民間企業や団体の協賛、協力を得て、実施しています。

名人は、造林手、炭焼き、船大工、木工職人、漁師など、長年、自然と関わりながら、その恩恵を受けて仕事をしてきた人々です。一方、「聞き書き」に参加する高校生の多くは都市で暮らしています。自然に対する憧れはあっても、そこで生きていくための知恵も技術も知らない。そんな彼らが、初対面の名人を訪ねて、一人で「聞き書き」に出かけます。

● 「聞く」ことから出会う

「聞き書き」の基本は、「聞く」という行為です。双方向のやりとり＝「対話」によって成り立ちます。「聞き手」の興味や関心によって話題は変化していきます。「聞き手」と「話し手」が共感し、互いに心を開かなければ、深い「対話」は成立しないのです。

「聞き書き甲子園」では、「聞き手」は高校生。「話し手」は主に 60 代から 80 代の方、つまり高校生のお爺さん、お婆さんあたる世代です。生まれ育った環境の違いや世代の違いを乗り越えて、高校生は相手を理解しようと努めます。孫のような高校生だからこそ、名人も丁寧に話を

してくれることもあるでしょう。そして、お互いに信頼関係が生まれれば、家族にも話さないような大切な話を聞かせてもらえることもあり得るのです。

近年、日本では、インターネットや携帯電話、テレビゲームなどに夢中になり、人とコミュニケーションをとることが苦手だという若者が増えています。また、社会のさまざまな課題は、教科書やテレビ、インターネットなどを通じて知り、学ぶことがほとんどです。

名人を訪ね、その地域の自然や風土を感じ、その人が働く現場を見て話を聞くことは、とても貴重な体験です。高校生は、「聞く」ことを通じて、農山漁村のさまざまな課題を身近なものとし感じ、社会との具体的な接点をもつのです。

たとえば長年、林業を続けてきた名人は、季節ごとの森の変化や山の見方を教えてくれるでしょう。森で働くことの誇りや喜び、厳しさと同時に、跡を継いでくれるはずの息子が都会に暮らしていることの寂しさについて打ち明けてくれるかもしれません。高校生は、名人が語る「物語」に自分自身を重ね合わせながら、働くこと、生きること、そして人生がもつ意味について考えを巡らせます。

● 「聞き書き」から得るもの

「聞き書き」では、対話はすべて録音し、それを書き起こす作業を行います。録音テープを再生し、止めては、書き起こす。高校生は、名人の言葉を何度も繰り返し、反芻します。その過程で、高校生は、直接、話を聞いた時には、聞き流していた大切な言葉に気づくこともあるかもしれません。「これが、この人の言いたいことだったのだ」と改めて思い至ることもあるでしょう。書き起こしは大変手間のかかる作業ですが、実は、「話し手」への理解を深めるためにも必要な作業なのです。



ある高校生は言いました。「書き起こした文章をまとめていくうちに、名人の言っていることが、いつの間にか、自分の言いたいことになってきた。この不思議な感覚は、聞き書きでしか味わうことはできない」と。

一方、「話し手」である名人の中には、「自分の人生を振り返りながら、人に話をするのは初めてだった」という人も少なくありません。「自分の人生など立派なものではないし、話す価値もないと思っていたけれども、高校生がまとめた文章を読み返してみると私の人生も無駄ではなかったと思えた。ありがとう」と高校生に話してくださった方もいます。「聞き書き」は、このような二人の関係性を通じて、「個の尊厳」を取り戻す作業でもあるのです。

● 「聞き書き」で育った若者たち

「聞き書き甲子園」が始まって10年。高校生による「聞き書き」は、もうすぐ1000人を超えようとしています。この膨大な記録は、自然

とともに生きてきた日本人の知恵や技術の貴重なアーカイブです。同NPOでは、これらの「聞き書き」作品を冊子にまとめるとともに、インターネット上の電子図書館でも公開しています。

同時に、「聞き書き甲子園」の取組は、記録だけに留まりませんでした。「森が泣いている」、「ムラが寂しくなった」と語る名人の言葉に心動かされた高校生たちはグループを組織し、日本各地の農山漁村に入って、里山整備や棚田の保全、藻場の再生活動などに取り組んでいます。活動で大切にしていることは、「聞き書き」で、その集落の人々の想いを汲み取り、将来の夢を共有することです。日本の農山漁村では過疎高齢化がすすんでいます、「聞き書き」を通じて、地域の未来と希望をつなぐ活動が行われているのです。

このような「聞き書き甲子園」の取組は、国連が提唱するESD（持続可能な開発のための教育）の事例のひとつとしても注目されています。

● 学校の教育現場で

「聞き書き甲子園」をきっかけに、学校のカリキュラムでも「聞き書き」の手法が取り入れられるようになりました。

埼玉県にある筑波大学附属坂戸高等学校では、「環境創造」と呼ぶ授業の中で、「聞き書き」を行っています。ある年は、「竹の活用」に焦点をあてて、竹で縄をつくる伝統技術や、竹で農具をつくる人、あるいは、竹で炭を焼く職人の「聞き書き」を行いました。つくるものや用途によって竹の種類や伐る時期などが異なります。同じ竹でも異なる技術によって、さまざまなものに生まれ変わります。人間の工夫の多彩さ、その知恵の素晴らしさを再認識する授業になりました。

この授業を担当した教諭は、キャリア教育の一環として、「聞き書き」を高く評価しています。



10代後半の高校生は、ちょうど、自分自身の進路について悩む時期でもあります。将来、どんな職業に就くことを夢や目標とするのか。大学に進学するのか、あるいは、卒業後、すぐに就職するのか。これから大人への一歩を踏み出そうとしている彼らにとって最も参考になるのは、年長者の人生観や職業観に学ぶことです。人と出会う中で、彼らは自ら人生の指針となる価値観を育むのです。

● 「聞き書き」は地域をつなぐ

秋田県角館市の公立中学校では、国語の授業の一環として、数人がグループとなり、自分たちが暮らす地域の人への「聞き書き」を行っています。

ある年は、学校の近くの商店街で「聞き書き」を行いました。豆腐屋さん、魚屋さん、雑貨屋さんなど、さまざまな職業の人が対象です。

それまで、生徒のお母さんたちの多くは、商店街ではなく、スーパー

マーケットで買い物をしていました。その方が、たくさんのものを安く買うことができ、便利だからです。けれども、中学生たちは商店街で働く人、たとえば、豆腐屋を営むお婆さんと親しくなりました。自分たちが起きるよりも、ずっと朝早くから店に立ち、大豆を丁寧に煮て、豆腐をつくっていること。大豆は、地元の農家から直接仕入れていること。作りたての豆腐は、あたたかく、甘い香りがすること。そして、彼らは、お母さんに言いました。「やっぱり、豆腐はスーパーよりも、あのお店で買いたい。明日から、あの店で買おう」。

「聞き書き」を終えてからは、その商店街で働く人の顔が見えるようになり、その人たちがどんな想いで働いているかがわかるようになりました。そして、朝、商店街を通るときに、「おはようございます」と、挨拶をする声が響くようになったのです。

かつて日本では、地域コミュニティの結びつきは強いものでした。人々は地域の暮らしをつくり、維持するために、お互いに支え合い、助け合ってきたのです。

ところが、特に都市では、人と人の結びつきが希薄になっています。人々の絆を取り戻し、地域の足元をみつめ直すためにも「聞き書き」は有用です。

● 海外での「聞き書き」

以上のような日本での「聞き書き」の取組は、近年、海外からも注目されるようになりました。たとえば、インドネシアでは、自然とともに生きてきた地域の伝統的な暮らしをみつめ直すために、高校生による「聞き書き」を実施しようという動きがあります。

人々の暮らしや生物多様性を守るためには、原生的な自然の保護だけでなく、人が関わることによって形成・維持されている農山漁村を含む

二次的な自然環境の保全も同様に重要です。長年にわたって人間の影響を受けて形成・維持されてきた自然環境は世界各地に見られ、地域の風土・文化・社会経済などの状況に応じて形態は異なるものの、産業構造の変化や人口の増減等により世界の多くの地域でその保全や活用の課題に直面しています。

日本の「聞き書き甲子園」のような取り組みは、こうした課題を持つ地域において、幅広く応用ができます。世界各地で「聞き書き」が行われることは、それぞれの地域において、これまでの持続可能な自然資源の利用や管理手法を再評価することにつながりし、人間と自然の良好な関係の維持や再構築することに貢献することでしょう。



先人の知恵が凝縮した 「合掌造り」

話し手：小林亀清 79歳 X 聞き手：河合和香 17歳

●自然にかえる材料だけで屋根を作る

22、3歳ごろまでは、家で炭焼きを手伝っていたんです。戦後は山も荒れていたから植林をしようっちゅうことで、五箇山^(※1)でも植林が始まった。それで森林組合に入ったんです。山仕事をしながら、「合掌造り」^(※2)の屋根葺き作業にも携わってきました。

「合掌造り」の材料はみんな自然のもんです。屋根の骨組みはブナ、スギ、クリ、マツなどの材を使って、その上をカヤ^(※3)で葺くんです。すべてが地面にかえりますから。「合掌造り」は森でできているようなもんです。

●結（ゆい）による助け合い

小学校の頃は、私の家も、地域のほとんどの人も「合掌造り」に住んでいました。その頃は「結」（ゆい）の時代やったな。「結」っちゅうのは屋根を葺き替える時に隣近所の人が手伝いに来て、その代わり、自分も他の人の葺き替えを無償で手伝う、そういう仕組みです。互いに労力の貸し借りをして屋根を葺くんやな。私もそうやって手伝いながら、見よう見まねで覚えてきたわけです。

でも1955年頃からカヤ葺きが姿を消して、瓦やトタン屋根に変わりました。そしたら「結」で屋根を葺き替えようと思っても、手伝ってもらい相手がいなくなってしまう。それで森林組合が加勢して屋根葺きをするようになりました。

●風土に適したカヤを使って

屋根を葺くカヤは、カリヤスっちゅう草です。カリヤスは細くて中が空洞だから、濡れても乾きやすい。ススキより細いから密度が高い屋根に仕上がって屋根が長持ちします。

カヤ場（カヤが育つ場所）は急な斜面です。まずその斜面で草を刈って焼畑をします。焼畑した灰があるうちは畑にして食べ物も採れるので、最初はソバをまいたり、アズキをまいたり。その後、畑に栄養がなくなってきたらカヤを植えます。10月20日を過ぎたらカヤを刈り取って、乾燥させて、屋根に葺くわけです。

●人の知恵と森の力

五箇山は豪雪地帯ですが「合掌造り」が倒れたり、つぶれたなんていう話は聞いたことがありません。屋根材は縦横、斜めに組んであって、互いに支え合う働きを持っているんです。先人の知恵と森の力、そして力学が凝縮して合掌は成り立っているっちゅうことです。

※1…富山県南砺市の旧平村、旧上平村、旧利賀村をあわせた地域の名称。

※2…日本の伝統的な住宅建築様式のひとつ。掌を合わせたように三角形に屋根材を組むことから「合掌」と名付けられたといわれる。五箇山の合掌造り集落は、岐阜県白川郷とともに1995年、ユネスコの世界文化遺産に登録された。

※3…屋根葺きの材料として使用されるイネ科植物の総称。ススキ、カリヤス、ヨシなど。



小林亀清・こばやしかめきよ 1929年、富山県南砺市（旧上平村）生まれ。森林組合に所属しながら、伝統的な合掌造り民家の屋根葺き技術を継承してきた。現在は、後継者の育成に務めている。

シラス漁から、 自然のつながりをみつめる

話し手：岩崎晃次 64歳 × 聞き手：吉井萌恵 16歳

●シラスは海の白米

16歳の頃から親父と一緒にシラス漁をはじめました。漁師は俺で3代目になる。

シラスっていうのはマイワシ、カタクチイワシ、ウルメイワシなどの稚魚のこと。長さは3センチぐらい。半透明でこけら（うろこ）がないの。シラスは「海の白米」なんだよ。いろんな魚の餌になるからね。海の白米がなくなっちゃうとみんな生きていけなくなっちゃうよ。

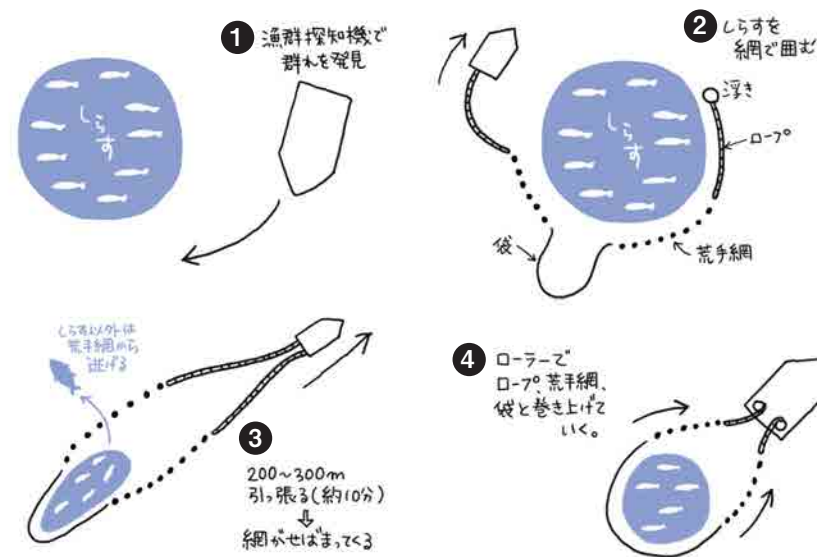
●網の工夫で群れを追いかむ

シラスが食べるプランクトンは真水と塩水の境に大繁殖する。それを食べようとして、シラスは沖合から近づいてくる。だから、山から川、海へと流れてくる真水が大事なんだ。

漁の時期は3回。春の4月から5月半ばが一番とれる時期。後は夏と秋。春は湾内の浅瀬で、その後は岸から2キロぐらい離れた沖に出て行く。

今は魚群探知機でシラスの群れを見つけるけど、昔は勘ですよ。「シラスが来るぞ」という春の匂いがするんだ。沖合から来る空気の匂いを感じ取って、じゃあ漁に出てみよう。あとシラスの顔（種類）を見る。当たると何とも言えない嬉しさがあったね。

シラスを獲る網は、100メートルの長さのロープの先に100メートルの荒手網がついていて、その先に30メートルの長さの袋網がついて



いる。荒手網の目合は1メートルぐらい。袋網は、最初は3センチの網目が5メートルついている。それから、だんだん小さくなっていった最後は0.5ミリだよ。シラスの群れを囲むように円形に網を落とす。大きな魚は逃がして、群れのシラスだけが網に入るような仕組みなんだね。

とったシラスは自分で加工して販売するの。家族経営だよ。水洗いして3%の塩分でゆであげる。塩は甘みのある天日塩（※1）。ゆで上がった後早く冷まして冷蔵庫へ。それが味につながってくる。他にもゆでたものを干して売ったり、生のまま売ったり。

●山があって、川があってこそその海

宅地が増えて山がなくなるって事はさ、やっぱり水質が、海に出る水が悪くなるわけだよ。今は下水道が整備されてきてはいるけれども、家庭から出る洗剤とかが流れて川の近くから汚染される。

海もね、埋め立てしちゃったらなくなっちゃうんだから、稼げなくなるわけ。だから自然は残しておいて方がいいわけだよ。山があって川があって海に注ぐと、そういうのが一番大事だよ。

※1…海水を原料とし、太陽の熱や風を利用して凝縮し、結晶化する製法による塩。ミネラルを多種豊富に含む。

岩崎晃次・いわさきこうじ 1945年、神奈川県横須賀市生まれ。中学校卒業後、父親に教えられてシラス漁を始めた。現在は、4代目の息子と共に漁を行っている。

種を採り、 100年先の森を育てる

話し手：杉本充 70歳 × 聞き手：代田七瀬 15歳

●引き継いだ、おやじの仕事

生まれ育ったのは奈良県川上村です。生家は山の中腹で、子どもん時はもっぱら山に入って遊んどったわ。冒険好きのいたずらっ子でした。

22歳の時、親父の手伝いしとってね。自分で木に登ってみたけど、2メートルほどで登れへんのですわ。そしたら親父が「そんなことか！ 足たたき折ったるわ。」って。親父に負けたらあかんと思うて、徐々に仕事を引き継いでいったちゅうことです。

●100年先を想って種を採る

川上村は、雨が多くスギの成育に恵まれた土地で、面積の70パーセントが人工林^(※1)です。先人たちの努力によってスギの美林が構成されたんですわ。良材を採るには良い苗木が必要。良い苗木をつくるには優れた遺伝子の種子が必要です。だから種採りは原点の原点や。

種採りは、秋の土用（10月20日～11月10日）が適期です。まずは母樹の選定。木の形と樹皮の表情を見るんです。完璧になるには30年かかりましたよ。木が育って100年たったときのことを想像して責任を感じるんです。

木登りは軽子（かるこ）を使います。軽子ちゅうのは、ロープの両先に拍子木のような木が巻き付けてある道具のこと。それを木に絡まして足を乗せて登っていくんや。樹齢70～80年、高さ40メートルの木に登るんで、木の上はパアーっと山が見渡せる。鳥の気持ちがわかるわな

あ。

登ったら、鎌で球果がついてる枝を切り落とすんですわ。種採りしてる時は集中してせな。でも楽しくて、つい歌ったりしてる時があるんよ。

落とした枝を束にして2週間乾燥させる。大きな桶に束をバサバサ当てると、米粒大の種が、球果からいっぱい出てくるんです。ゴミを取り除くために、網目の細かい篩（ふるい）に何回もかける。選んだ種は春まで貯蔵するんです。

●自然界のバランスを考えて、 林業に取り組む

森は家や。人間だけやなしに、動物や植物が共存するための家や。人工林だけでなく天然林^(※2)を残すことで自然界とのバランスがとれる。山の高い所は採算が取れんので、そこを元の天然林にしたら動物も住みやすくなるし、下の人工林にも栄養分がいく。けど、人工林にした所は、必ず手入れをせにゃあかんのです。子どもと一緒にや。そして森を守り、育てる知識は受け継いでいかんと。森は人間が生きていくための一番の元やないかい。

※1…人が苗木を植え、育てた森。日本ではスギ、ヒノキ、カラマツなど、建材に適した針葉樹林が多く、森林面積全体の約40パーセントを占める。

※2…自然の力で生まれ育った森。日本ではコナラやクヌギなどの広葉樹林が多い。



杉本充・すぎもとみつる 1932年、奈良県川上村生まれ。中学校卒業後、本格的に林業の仕事に携わる。軽子登りといわれる技で、杉の種を50年以上採り続けてきた。

焼畑による 持続可能な山の利用

話し手：椎葉クニ子 85歳 × 聞き手：中山きくの 15歳

●人間が自然に合わせる

私の実家は貧乏やったから、小学3年の頃から焼畑（※1）の手伝いしよった。そして23歳で嫁いできて、今日まで62年間、一度も休まずに焼畑してきたと。

1年目にはソバ、2年目にヒエ・アワ、3年目にアズキ、4年目にダイズを播く。4年以上経ったら地力が低下すつと。そうしたらもう作物は作らんで、何十年も自然に返す（※2）から自然破壊も何もない。このルールは全然変えられん。人間が自然に合わせていかんと。

●火入れと山の神様

火入れの時期は8月じゃけえ、6月には「やぼ」（畑）にする場所の、青葉（草木）を切ると。「やぼ」の周囲には「火断ち」（防火帯）をつくると。「火断ち」ちゅうのは、「やぼ」の周りの木を切って落ち葉を除けて、火が余らん（燃え移らない）ようにするものよ。

火入れは1人が鎌先（斜面の上の方）から火い付けて、見計らって1人が縦畦に（斜面の上の方から縦に打ち降ろすように）火い付けて、真ん中まで一直線に一度に焼く。上を焼いたら、もう火事になることはないけえ、後は下から焼いてくると。あちこち火い付けたら火事になるからね。

火入れの時は山の神様にお願いすつとよ。

「これより このやぼに火を入れ申す 蛇（へび） わくどう（カエル）



虫けらども そうそうに立ち退き給え 山の神様 火の神様 どうぞ火の余らぬよう また焼け残りのないよう おん守りやってたもうれ」山に火を入れるけえ、動物には逃げるように、そして神様に山を守って下さいってことね。目には見えんけど山の神様はちゃんとおるとやから。

●種まきと収穫

火入れの後はソバの種まき。種まきは水もやらんでいいと。地面を掃けば消し灰がかかって、朝露で生えつとやから。

ここのソバの品種は香りと粘りがあっていいとよ。この種を切らしたくないから、今でも焼き畑すつと。動物にしろ、植物にしろ、種がないと生きていかれんけえね。

ヒエ・アワは翌年の5月に種まくと。収穫した穂は乾燥して、木造の倉に入れて100年でも保存が効く。だから、私のところには60年前のヒエもちゃんととってある。焼畑を知つとれば餓えることはないけえね。

※1…山林や原野を伐採し、火をつけて焼き、その灰を肥料として作物を栽培する農法。

※2…耕作を放棄した場所は約20年で植生が回復し、樹木が繁茂する。その状態を見計らって、再び同じ場所で焼畑をする。

椎葉クニ子・しいばくにこ 1924年、宮崎県椎葉村生まれ。伝統的な焼畑農業を長年、続けながら、在来種のソバをはじめヒエ、アワなどの雑穀を栽培している。

伝統の技を現代に生かす 船大工職人

話し手：那須清一 75歳 × 聞き手：佐藤広大 17歳

●私が育った時代

とにかく昔は食べ物もない時代やったもんで、食っていくために百姓をやったり、川漁をやった。夏は、昼も夜もアユ漁。夜は、かがり火をつけて網へ追い込む漁をやった。次の日は眠いけど、何とか朝起きて学校に行ったね。

親父は14歳で船大工に弟子入りし、28歳で家に戻って仕事を始めたんや。主に川漁に使う舟をつくった。体格は小柄やったけれども、何ごとにも競争意識を持っておったと思う。そんな親父からやれって言われて、船大工の仕事を受け継いだんや。

●基本となるのは乾燥した材

舟の材は、このあたりはほとんどコウヤマキ^(※1)やね。コウヤマキは水に強いもんで。あと、ヒノキを使うときもある。

材を選ぶときには、木の反り加減とか太さを見る。舟に使うには真っすぐより、ある程度、反っておった方がいい場合もある。あと、死節^(※2)があったり、腐りが入っておると使いものにならんこともある。1本の丸太で舟に使えるのは半分ぐらいだね。

山から伐り出したら、板にして2、3年、十分に乾燥させる。乾燥が未熟な状態でやった舟はガタが来やすい。つくるのを急いだがために悪い結果につながったりする。納得する状態まで材料を乾燥してから加工することがひとつのこだわりやし、今でも続けておる。



●舟づくりと先人からの知恵

最初は舟底をつくって、底が出来上がたら横腹をつくる作業にかかる。舟は一枚の板で出来ておらんもんで、板と板を合わせる場所は「木殺し」をする。板の合わせ目を1センチぐらいの幅でゲンノウ（金槌）で叩いてへこませると、叩いたところは水平より少し窪んだ形になる。それが「木殺し」。合わせる両方の板を「木殺し」しとくと、水に浸かったときに膨張して、板と板の隙間に水が入ってこんようになる。仕事としては一番大事なことや。

●仕事の喜び

舟は、乗る人の身長とか体重の差で川に浮いた時のバランスが違う。流れの早さや川幅、いろいろ条件があるもんで、なるべく舟を使う人が仕事をやりやすいように、使う人の立場になって舟をつくりたいってゆーのが基本的な姿勢や。舟を注文した人が、丈夫でええ舟やって言ってくれるのが最高の喜びやね。

※1…日本固有の常緑針葉樹。水に強く腐りにくいため、湯船や橋をつくる材にも使う。

※2…幹の成長に巻き込まれた枝の部分の年輪を「節」と言う。「死節」は、枝が枯死した状態で巻き込まれたもので、板材にすると乾燥収縮して抜け落ちてしまうことがある。

那須清一・なすせいいち 1931年、岐阜県美濃市生まれ。父親の跡を継いで船大工となり、川漁に使う舟を中心に、これまでに500艘以上の舟づくりを手がけてきた。

あ と が き

SATOYAMA イニシアティブの取り組みは、各地域の特性や現代の社会経済に応じた形で持続可能な土地や自然資源の利用が行われるランドスケープを維持・再構築しようというものです。そのためには、その土地に特有の伝統的な知識と近代知識の融合や、先人たちの技術の継承が重要な要素であると考えています。

聞き書きによって、こうした伝統的な知識の集約をし、同時に聞き書きを通して若い世代の能力開発を促進し、地域の伝統・文化価値の理解と重要性の認識を高めることを期待しており、そのために聞き書きという有効な手法や取り組みをまとめた本テキストを、国内外で広範に利用していただけたら幸いです。



聞くこと・記録すること — 「聞き書き」という手法 —

2012 年 3 月 発行

著 者：代田七瀬・吉野奈保子

装 丁：岩井友子

製 作：SATOYAMA イニシアティブ国際パートナーシップ事務局
国連大学高等研究所

製作協力：NPO 法人共存の森ネットワーク 環境省

